

『南山神学』34号(2011年3月) pp. 229-253

## グレゴリオ聖歌研究 (3)

西脇 純

### はじめに

本研究のねらいは、「神のことば」として今に歌い継がれるグレゴリオ聖歌に、聖書解釈史ならびに典礼史の視点から接近することにある。その予備考察として、これまでグレゴリオ聖歌の成立史の素描を試みてきた<sup>1)</sup>。本稿においても、前稿への若干の補足(1)の後、聖歌学校の設定(2)、カール大帝時代におけるローマとの人的交流(3)、ローマ聖歌集の導入(4)、聖歌古写本の伝承(5)などのテーマを概観することによって、引き続きカロリング期の典礼改革の足跡を辿ることにはしたい。

### 1. 正しさを求めて

8~9世紀にかけて顕著になったフランク王国とローマ教皇の互惠関係の強化は、フランク教会へのローマ典礼の導入をもたらし、フランク教会ではローマとの絆のしるしであるローマ典礼の正しい継承に意が注がれた。特にカール大帝(在位768-814年)の下で推進された、聖書と秘跡書の改訂事業をはじめとする典礼改革は、「正しきの希求」という根本姿勢に貫かれていた。正しさを求めること、それこそが神に嘉される生き方であり、神は「正しく生きる」人

---

\*略記は、別記しない限り、S. M. Schwertner, Theologische Realenzyklopädie. Abkürzungsverzeichnis. 2., überarb. und erw. Aufl., Berlin - New York 1994. に従った。

<sup>1)</sup> 拙稿「グレゴリオ聖歌研究(1)」『南山神学』第32号(2009年)209-228頁、ならびに、同「グレゴリオ聖歌研究(2)」『南山神学』第33号(2010年)237-258頁。

間の生のあり方に報いて、この地上に祝福と福利とをもたらしたもうと考えられたのである。

中世を通じて広く影響を与えたイシドルス (Isidorus, ca. 560-636 年) の『命題集』には、「諸王 *reges*」という言葉が「正しく行うこと *recte agere*」に由来するという語源説が紹介されている<sup>2</sup>。中世史家 Dieter Hägermann によれば、教皇ザカリアス (在位 741-752 年) がピピン 3 世 (宮宰 741-750 年, 王位 751-768 年) にフランク王への登位を認めた背景にも、このようなイシドルス的な「王」理解があった可能性があるという<sup>3</sup>。メロヴィング朝最後の王キルデリク 3 世 (Childerich III, 在位 743-751 年) に替わって王位に就く正統性の保証を求めたピピン 3 世に対し、教皇は「権力を持つ者が王と呼ばれる方が、王としての権力のないまま留まっている者を王と呼ぶよりもよい」と応じ、これを認めた<sup>4</sup>。年代記の記述は、王として正しく振舞うこと、すなわち当時の状況においてはローマの守護者となることが、教皇ザカリアスとピピン 3 世の双方の間で了解されたことを物語っている。こうした「王にふさわしい正しい振る舞い」は、いわば一つの政治エトスとなって息子カール大帝へと受け継がれていったと考えられよう。

典礼改革において「正しさの希求」という心的態度で臨んだカロリング期にとって、典礼執行が正しく行われるか否かは、国家の安寧がそれによって左右されると考えられたほどに大きな意味を持っていた<sup>5</sup>。

<sup>2</sup> Isidorus, *Sententiae* 3, 48 (= PL 83, 719A): *Reges a recte agendo vocati sunt, ideoque recte faciendo regis nomen tenentur, peccando amittitur.*

<sup>3</sup> Cf. D. Hägermann, *Karl der Große. Herrscher des Abendlandes. Biographie*, Berlin 2000, 67-69.

<sup>4</sup> *Annales Regni Francorum* 749 (= AQDGMA 5, 14, l. 4-6): *Et Zacharias papa mandavit Pippino, ut melius esset illum regem vocari, qui potestatem haberet, quam illum, qui sine regali potestate manebat [...].*

<sup>5</sup> Cf. A. Angenendt, *Libelli bene correcti. Der "richtige Kult" als ein Motiv der karolingischen Reform*, in: Th. Flammer u. D. Meyer (Hrsg.), *Liturgie im Mittelalter (FS A. Angenendt, Ästhetik - Theologie - Liturgik 35)*, 227-243.

カール大帝の文教政策を支えた前出アルクイン（Alcuin, 730/735-804年）の詩には、典礼の場で聖書を朗読する者の心構えが次のようにうたわれている。

この書物の聖なる文章を朗読する者  
 至上なる神のみことばを聖堂で〔宣べる〕朗読者はだれでも  
 声によって意味、題、コロン、コンマの間をよく区切って語れ  
 そうすればアクセントが口から響く術を心得る  
 潤いのある声により遠く 聖堂に同席する者の耳にまで響くようにせよ  
 そうすれば聴く者は皆 彼の口によって神を賛美するだろう<sup>6</sup>

聖歌演奏も「神のみことば」たる聖書からの朗読である。ここでアルクインが説く発音技術の修得は、聖歌歌手たちにも当然求められたであろう。そのために、フランク王国では、ローマを雛型とする聖歌隊学校（Schola Cantorum）が各地に設置されてゆくことになるのである。

## 2. 聖歌隊学校の設立

ピピン3世の時代にはメッツ司教クローデガングが中心になってローマ聖歌の導入が行われた。同地には聖歌指導の任に当たる教育機関が組織されていたと推測される<sup>7</sup>。

その影響はリヨンにまで及び、カール大帝の時代には大帝の推進する典礼改革の一つの中心地に成長するまでになった。リヨン司教レイドラド（Leidrad,

<sup>6</sup> Alcuini Carmina LXIX, In sacrum bibliorum codicem (= MGH.PL 1, 292, l. 183-188):  
 Quisque legat huius sacrato in corpora libri, / Lector in ecclesia, verba superna dei, /  
 Distinguens sensus, titulos, cola, commata voce / Dicat, ut accentus ore sonare sciat. /  
 Auribus ecclesiae resonet vox vinula longe, / Omnis ut auditor laudet ab ore deum. Cf.  
 Angenendt, Libelli, ibid. 239.

<sup>7</sup> 拙稿「グレゴリオ聖歌研究（1）」（N. B. 1）219-223頁を参照。

在位 797/798-816 年) は、晩年のカール大帝にあてた書簡 (813 もしくは 814 年) のなかで、次のように報告している。

信仰に篤くあられる陛下は、メッツの教会から聖職者を一人お送りくださるようにとの私の願いを聞き入れてくださいました。神のお助けと陛下のご支援のもと、彼の活動によって、リヨンの教会における詩編の歌い方は刷新され、いまや聖務日課の遂行のために規定が求められるところの幾分かは、聖なる宮廷の典礼に従って (*secundum ritum sacri palatii*) 自力で行うことができるほどになりました。と申しますのも、[当地で] わたしはいくつかの聖歌隊学校を持ち、その [学校で学ぶ者の] 多くは、他の人々を教育できるほどにすぐれた教育を受けているからです。<sup>8</sup>

ここで模範とされる「聖なる宮廷 *sacrum palatium*」は、カール大帝が晩年を過ごしたアーヘンの宮廷を指すと思われる。しかしながら、詩編歌唱の指導者がメッツから派遣されたことを考慮すれば、少なくともカール大帝の存命中にはメッツがなおローマ式典礼導入による刷新運動の一拠点であり、リヨンにおいてもローマ式典礼による刷新が受け継がれたと推察してよいだろう。

---

<sup>8</sup> *Epistolae Variorum Carolo Magno Regnante Scriptae* 30 (= *MGH.Ep* 4, 542, l. 34 - 543, l. 4): *Et ideo officio quidem vestrae pietatis placuit, ut ad petitionem meam mihi concederetis unum de Metensi ecclesia clericum, per quem Deo iuvante et mercede vestra annuente ita in Lugdunensi ecclesia restauratus est ordo psallendi, ut iuxta vires nostras secundum ritum sacri palatii nunc ex parte agi videatur quicquid ad divinum persolvendum officium ordo deposcit. Nam habeo scholas cantorum, ex quibus plerique ita sunt eruditi, ut etiam alios erudire possint. Cf. K. Levy, *Gregorian Chant and the Carolingians*, Princeton 1998, 214-215; *Ibid.*, *A New Look at Old Roman Chant - II*, in: *Early Music History* 20 (2001) 173-197. 181-182. 翻訳にあたり、Levy, *A New Look*, *ibid.*のほか、ピエール・リシエ著、岩村清太訳『中世の生活文化誌—カロリング期の生活世界—』(東洋館出版社、1992年) 240頁、さらに、ピエール・リシエ著、岩村清太訳『ヨーロッパ成立期の学校教育と教養』(知泉書館、2002年) 385頁をも参照した。*

聖歌隊学校を設立する同様の動きは各地でみられた<sup>9</sup>。レイドラドがカール大帝に宛てた書簡からは十数年ほど遡るが、ザルツブルグ司教アルン（Arn, 740以降-821年）も、『司牧指針』（798年）のなかで、聖歌教育が「ローマ人の伝統に従って」行われることを定めている。

各司教は自分の都市に学校を設置し、ローマ人の伝統に従って教え、〔聖書の〕読書に専念し、そこから義務を学ぶことのできる、知恵の教師を〔置かなければならない〕。個々の典礼は、聖務日課を通して教会のなかで適切な時間に、しかるべき祝い〔の内容を〕を、その聖歌が神の教会を飾り、聴く者が教化されるように歌われねばならない。ときに賛美をもって、ときに悔悛の心をもってこれを見聴きする民が、天上の愛へと引き寄せられ、ふさわしく悔悛を行うよう、最高の畏敬の念と神への愛とをもって主の祭壇に仕えなければならない。<sup>10</sup>

民衆の教化をも視野に入れた聖歌教育が継続的に行われるためには、聖歌教師たち自身にもたえず「ローマ聖歌」を学ぶ研鑽の機会が与えられていなければならなかっただろう。そこで次に、カール大帝の治世下でどのような人的交流が行われていたかに目を向けてみよう。

<sup>9</sup> ピエール・リシエ著、岩村清太訳『ヨーロッパ成立期』、同書、67-68. 97-99頁参照。

<sup>10</sup> Armonis Instructio Pastoralis VIII (= MGH.Conc 2 Pars 1, 199, l. 27-34): *Episcopus autem unusquisque in civitate sua scolam constituat et sapientem doctorem, qui secundum traditionem Romanorum possit instruere et lectionibus vacare et inde debitum discere, ut per canonicas horas cursus in aeclesia debeat canere unicuique secundum congruum tempus vel dispositas festivitates, qualiter ille cantus adornet aeclesiam Dei et audientes aedificentur. Et cum summa reverentia et amore Dei ministrent in altare Domini, ut populus, qui hoc audiverit vel viderit, cum alia praedicatione vel illa compunctione, quam videt et audit, adtrahatur ad amorem caelestem et compunctus hoc agat, quod placeat.* 「悔悛」と訳される「compunctio / compungere」の意味について E. Kohlhaas, *Musik und Sprache im Gregorianischen Gesang* (AfMw.B 49), Stuttgart 2001, 74-75 mit Anm. 84. を参照。

### 3. カール大帝時代におけるローマとの人的交流

ローマ典礼の導入期における聖歌集は、記譜を持たず、聖歌テキストのみが収められていた。ネウマ記号付きの聖歌集が登場するのは9世紀半ば以降であり、それ以前の歌唱は記憶による口頭伝承に基づいて行われていた。ローマ聖歌の修得のためには、未知の聖歌がいわば「口移し *viva voce*」で教えられる必要があった<sup>11</sup>。そのためのローマとの人的交流は、ピピン3世の時代にすでに確認できる<sup>12</sup>。

カール大帝は、「一般訓令 *Admonitio generalis*」(789年)のなかで聖職者に「ローマ聖歌」を十全に学ぶことを求め<sup>13</sup>、「リブリ・カロリーニ」(790-792年頃)においてもローマ聖歌との一致の重要性を強調した<sup>14</sup>。ここから、カール大帝の治世にあっても、聖歌教授にあたる教師のフランク王国への派遣や聖歌隊長のローマ留学などの人的交流が継続して行われたろうことは十分に推察できる。

例えば助祭ヨハネス (*Johannes Diaconus*, 825-880/882年)の『聖グレゴリウスの生涯』(875年頃)は、カール大帝の死後60年ほど経ってからの記録ではあるが、帝の治世下で、聖歌伝統の「泉」であるローマとフランク王国との間で歌手たちの行き来があった次第を、ローマ人の目で次のように描いている。

フランク人の王、わたしたちのバトリキウスなるカール [帝] は、ローマにおいて、ローマとガリアとでは聖歌に相違が生じていることに心を痛めておられた。ガリア人たちは傲慢にも、わたしたちのくだらない歌のせい

<sup>11</sup> カロリング期における聖歌指導法について、リシェ『ヨーロッパ成立期』(N. B. 8) 247-249. 371-372 (*Alcuinus, Carmina II VI = MGH.PL 1, 245-246*). 387-388 (*Notker Balbulus, Liber sequentiarum, Prologus = PL 131, 1003C-1004C*) 頁, ヨセフ・スミツ・ヴェン・ワースベルヘ著『音楽教育：中世の音楽理論と教授法』(人間と音楽の歴史 第III期第3巻, 音楽之友社, 1986年) 22-31頁を参照。

<sup>12</sup> 拙稿「グレゴリオ聖歌研究(1)」(N. B. 1) 223-225頁を参照。

<sup>13</sup> 同 216-217頁参照。

<sup>14</sup> 同 218-219頁参照。

で聖歌が墮落してしまったのだと非難した。一方、わたしたちの〔歌手たちも〕交唱集の正本を〔彼らに〕はっきりと示した。〔そこで帝は〕次のお尋ねになったという。「川と泉とではどちらがより澄んだ水を湛えているか?」「泉です」と答えた者たちに〔王は〕賢くも次のように仰せられた。「わたしたちは今まで川から汚れた水を飲んできたが、永遠に尽きることのない泉の流れの源へと急がなければならない。」さっそく彼は2名の彼の勤勉な聖職者を司教ハドリアヌスのもとに残し、見事によく訓練された彼らによって、メッツの町をかつての音楽の優美さへと連れ戻した。そしてメッツの町を通して彼のガリア全土を矯正なされた。

しかし、しばらく時が経ち、ローマで教育を受けた者たちが亡くなると、いとも賢き方〔カール帝〕は、ガリアの諸教会の聖歌がメッツ〔の聖歌〕から離れてしまっているさまをご覧になった。それぞれが、〔そちらの町の〕聖歌の方が誤っているのだと主張するので、〔帝は〕仰せになった。「ならば帰ろう、再び泉に。」そこで——今日の信頼できる筋によると——王の願いに心動かされた教皇ハドリアヌスは、2名の聖歌隊員をガリアに派遣した。彼らの判断により、王は、〔ガリア教会の〕すべてがその軽率さゆえにローマ聖歌の甘美さを失っていたことを知った。実にメッツのみが、粗暴さから若干離れていることも分かった。というわけで今日に至るまで、メッツはローマ聖歌に従い、同様にガリアおよびゲルマニアの諸教会の聖歌はメッツの教会に従っていることが、純然たる真実を愛する者たちによって確認されている。わたしはこれらを先を見越して描いた。これで、ガリア人たちの議論の余地もない軽率さを見過ごしたことにはならないで済むだろう。<sup>15</sup>

---

<sup>15</sup> Johannes Diaconus (Hymmonides), Vita St. Gregorii 9 (= PL 75, 91B-92A): Sed et Carolus noster patricius, rex autem Francorum, dissonantia Romani et Gallicani cantus Romae offensus, cum Gallorum procacitas cantum a nostratibus quibusdam naeniis argumentaretur esse corruptum, nostrique e diverso authenticum Antiphonarium probabiliter

この逸話に登場する教皇ハドリアヌス1世（在位772-795年）は、カール大帝の求めに応じて、「混じりけのない秘跡書 *sacramentarium immixtum*」を791年より前に帝に届けさせている<sup>16</sup>。同様のやりとりが聖歌歌手の派遣や招聘というかたちで行われていたことも十分に考えられる。カール大帝は、ランゴバルドの併合のためイタリア遠征に出た774年、ローマで教皇ハドリアヌス1世と会見し、教皇とともに復活祭を祝っている<sup>17</sup>。助祭ヨハネスが語るローマとガリアの間の聖歌の齟齬の重大さを、カール大帝はこの機会に認識したのかもしれない<sup>18</sup>。

『聖グレゴリウスの生涯』が書かれたおよそ10年後に、同様の出来事が今度はフランク人の口から語られることになる。カール3世（肥満王、839-888年）の命によりノートケル（Notker Balbulus, ca. 840-912年）が883年以降に著わした『カール大帝伝』の記述である。ノートケルは助祭ヨハネスの『聖グレゴ

ostentarent, interrogasse fertur quis inter rivum et fontem limpidiorem aquam conservare soleret? Respondentibus fontem prudenter adjecit: Ergo et nos qui de rivo corruptam lympham usque hactenus bibimus, ad perennis fontis necesse est fluentia principalia recurramus. Mox itaque duos suorum industrios clericos Adriano tunc episcopo dereliquit, quibus tandem satis eleganter instructis, Metensem metropolim ad suavitatem modulationis pristinae revocavit, et per illam, totam Galliam suam correxit. Sed cum multa post tempora, defunctis his qui Romae fuerant educati, cantum Gallicanarum Ecclesiarum a Metensi discrepare prudentissimus regum vidisset, ac unumquemque ab alterutro vitiatum cantum jactantem adverteret: Iterum, inquit, redeamus ad fontem. Tunc regis precibus, sicut hodie quidam veridice astipulantur, Adrianus papa permotus, duos in Galliam cantores misit, quorum judicio rex omnes quidem corrupisse dulcedinem Romani cantus levitate quadam cognovit: Metenses vero sola naturali feritate paululum quid dissonare praevidebat. Denique usque hodie quantum Romano cantui Metensis cedit, tantum Metensi Ecclesiae cedere Gallicanarum Ecclesiarum, Germaniarumque cantus, ab his qui meram veritatem diligunt comprobatur. Hic ergo per anticipationem retulerim, ne indiscussam Gallorum levitatem videar praeterisse.

<sup>16</sup> 拙稿「グレゴリオ聖歌研究(2)」(N. B. 1) 251-252頁参照。

<sup>17</sup> 五十嵐修『王国・教会・帝国—カール大帝期の王権と国家—』(知泉書館, 2010年) 93-99頁参照。

<sup>18</sup> Cf. S. J. P. van Dijk, *Papal Schola versus Charlemagne*, in: Th. F. Kelly (ed.) *Chant and Its Origins (Music in Medieval Europe)*, 367-376. 372.



リウスの生涯』をすでに知っており、聖職者たちの往来に関する逸話においても、彼の解釈を盛り込んだいわば「ノートケル版」を披露する。以下は『カール大帝伝』からの抜粋である。

ここで、われわれの時代の人に信じ難いと思われることを、率直に述べておきたい。

これを書いている当の私にも、もし怠惰な現代人の虚言よりも教父の真実の言葉を信ずべきだと思わない限り、フランキアの教会の歌とローマの教会の歌との間に、大変な違いがあったとは、いまだにすっかり信じられないのである。それ故、うまずたゆまず神に奉仕し神を愛するカロルスは、学問の研究に可能な限りの進歩を達成し、自分の宿願を果たしたと喜んでいたが、その一方で、神への称讃が、つまり教会の讃美歌の旋律法が、地方ごとに、いやすべての伯領や司教区ごとに、それぞれまだ違っていることを、たいそう憂慮していた。

そこで今は亡き教皇ステファヌスに頼み——この教皇は最も臆病なフランキア王ヒルデリクスが廃位させられ剃髪したとき、古い祖先の慣例に従い、カロルスを王国の支配者として塗油した人であるが——、讃美歌に最も精通した聖職者を何人か派遣して貰うように努めた。教皇は王の立派な誠意と神の靈感による熱意に賛同し、12人の使徒の数に因み、教皇庁から、讃美歌に精通した聖職者を12名、フランキアの王のもとにおくってきた。[...]ところがギリシア人やローマ人はおしなべて、フランキアの栄光を常に嫉み、猜疑心に苛まれていたので、右の聖職者らもローマを出発するにあたって鳩首合議した、いかにすれば、王国や伯領でうたい方が相違し、統一や調和が享受されなくなるかと。

彼らはカロルスのもとにやって来ると、手厚く礼遇されたあと、特に偉れて立派な土地へ散らばって行った。各人銘々の赴任先で、それぞれ歌い方

を違え、考えられる限り不正確に自分でもうたい、そのように他の人にも教えようと苦心した。<sup>19</sup>

ここで語られるような策謀が実際にあったかはわからない。しかしその虚実にかかわらず、カール大帝が耳にした聖歌にはローマとフランク王国領内とでは大きな差があったということは、『聖グレゴリウスの生涯』と『カール大帝伝』の両者が同様に報告するところである。『カール大帝伝』によれば、この企みの後、カール大帝は、トリアーとメッツの歌唱とパリとトゥールのそれとが、同じ祝日の聖歌にもかかわらず異なって響くことに気づいた。この相違に他の者らも気づくに及んで、帝は教皇ステファヌス（2世）の後継者の教皇レオ3世

---

<sup>19</sup> Notkeri Gesta Karoli I, 10 (= Quellen zur karolingischen Reichsgeschichte III, Jahrbücher von Fulda. Regino Chronik. Notker Taten Karls. Unter Benutzung der Übersetzungen von C. Rehdantz, E. Dümmmler und W. Wattenbach neu bearbeitet von Reinhold Rau [AQDGMA 7], Darmstadt 1969, 321-427. 334, l. 11 - 336, l. 5): Referendum hoc in loco videtur, quod tamen a nostri temporis hominibus difficile credatur, cum et ego ipse qui scribo propter nimiam dissimilitudinem nostrae et Romanorum cantilenae non satis adhuc credam, nisi quia patrum veritati plus credendum est quam modernae ignavae falsitati. Igitur indefessus divinae servitutis amator Karolus, voti sui compotem quantum fieri potuit in litterarum scientia effectum se gratulatus, sed adhuc omnes provincias immo regiones vel civitates in laudibus divinis, hoc est in cantilenae modulationibus, ab invicem dissonare perdolens, a beate memorie Stephano papa qui deposito et decalvato ignavissimo Francorum rege Hilderico se ad regni gubernacula antiquorum patrum more perunxit aliquos carminum divinarum peritissimos clericos impetrare curavit. Qui bonae illius voluntati et studiis divinitus inspiratis assensum praebens, secundum numerum duodecim apostolorum de sede apostolica duodecim clericos doctissimos cantilenae ad eum direxit in Franciam. [...] Cum ergo supradicti clerici Roma digrederentur, ut semper omnes Greci et Romani invidia Francorum gloriae carpebantur, consiliati sunt inter se, quomodo ita cantum variare potuissent, ut numquam unitas et consonantia eius in regno et provincia non sua laetaretur. Venientes autem ad Karolum, honorifice suscepti et ad praeminentissima loca dispersi, et singuli in locis singulis diversissime, et quam corruptissime poterant excogitare, et ipsi canere et sic alios docere laborabant. 翻訳は、エインハルトゥス、ノケルス著、國原吉之助訳・註『カロルス大帝伝』（筑摩書房、1988年）71-72頁に依った。

にこれを報告したという<sup>20</sup>。教皇レオ 3 世はフランク王国に派遣されていた聖職者らを罰したうえで、フランク王国の聖職者 2 名に、カール大帝から派遣されたとは気づかれないようにローマで聖歌の修得にあたらせることを新たに帝に提案する。以下はノートケルが語る教皇レオ 3 世の発言である。

「[...] あなたのお傍の聖職者の中から抜群の逸材を 2 人送って下さい。そのさい私の所にいる者らが、2 人をあなたの輩下と気づかぬように。それから 2 人が神の御加護によりあなたの望まれる事柄に関して、完璧な知識を習得するように努めます。」<sup>21</sup>

この提案にそって派遣された 2 名の聖職者は短期間でローマ聖歌を修得し、フランク王国へと帰ってきた。

王はその一人を手許に残し、もう一人を自分の息子メティスの司教トロウゴの要請により、その教会へ送った。彼の勤勉な働きにより、この教会の歌い方は、同じメティスの地で影響力を持ったばかりでなく、全フランキアに非常な勢いで拡がり始め、いまではこれらの地方でラテン語を話す人

---

<sup>20</sup> Notkeri Gesta Karoli I, 10 (= Quellen [N. B. 19], 336, l. 5 - l. 15). この逸話のなかでノートケルは「教皇ステファヌス」を「教皇ステファヌス 2 世 (在位 752-757 年)」と理解する。この教皇の後に、パウルス 1 世 (在位 757-767 年)、コンスタンティヌス (在位 767-768 年)、ステファヌス 3 世 (在位 768-772 年)、ハドリアヌス 1 世 (在位 772-795 年)、レオ 3 世 (在位 795-816 年) が続く。

<sup>21</sup> Ibid. (= Quellen [N. B. 19], 336, l. 15 - l. 18): da mihi de latere tuo duos ingeniosissimos clericos, ut non advertant, qui mecum sunt, quod ad te pertineant, et perfectam scientiam Deo volente in hac re quam postulas assequantur. 翻訳は『カロルス大帝伝』(N. B. 19) 73 頁に依る。

たちの間にまで教会の讚美歌がメテンシス（メティスの歌）と呼ばれるに至った。<sup>22</sup>

逸話の結びに登場するカール大帝の息子、『ドロゴ秘跡書』（850年頃制作）でも知られるドロゴ（Drogo, 801-855年）がメッツの司教座に着座したのは823年、父カール大帝の死後である<sup>23</sup>。カール大帝（在位768-814年）とステファヌス2世（752-757年）の治世にも開きがある。カール大帝をローマ皇帝として戴冠したレオ3世の在位期間のみ（在位795-816年）カール大帝の治世と重なる。他方、『聖グレゴリウスの生涯』にも登場し、ローマ典礼の導入にあたりカール大帝も頼りにした教皇ハドリアヌス1世（在位772-795年）には一切の言及がない。

さらに、聖職者の派遣の順序も、助祭ヨハネスの『聖グレゴリウスの生涯』とはちょうど逆になっている。『聖グレゴリウスの生涯』では、先にカール大帝がフランク王国側から2名の聖職者をローマに残してローマ聖歌を学ばせ、後に教皇ハドリアヌス1世が聖歌隊員をフランク王国に派遣している。一方、ノートケルの『カール大帝伝』では、先に教皇ハドリアヌス1世が12名の聖職者をフランク王国に送った後に、カール大帝から2名の聖職者がローマに送られてくる。

このように、この逸話の情報はかなり混乱しており、史実としての蓋然性をどこまで認めるかの見極めは難しい<sup>24</sup>。にもかかわらず、①ローマ聖歌導入に

<sup>22</sup> Ibid. (= Quellen, *ibid.*, 336, l. 19 - l. 24): Qui unum secum retinuit ; alterum vero petente filio suo Truogone Mettensi episcopo ad ipsam direxit aeclesiam. Cuius industria non solum in eodem loco pollere set et per totam Franciam in tantum coepit propagari, ut nunc usque apud eos, qui in his regionibus Latino sermone utuntur, aecclesiastica cantilena dicatur Mettensis, [...]. 翻訳は『カロルス大帝伝』, 同73頁に依る。

<sup>23</sup> Cf. O. G. Oexle, Art. Drogo, Sohn Karls des Großen, in: LMA 3 (1999) 1405; K. Bierbauer, Art. Drogo-Sakramentar, in: LMA 3 (1999) 1405.

<sup>24</sup> van Dijk, *Papal Schola* (N. B. 18), 387-376. は、ノートケルの記述に多くの史実性を見出している。それによれば、教皇ヴィタリアヌス（在位657-672年）以降、ビザンツ典礼の影

あたりローマとフランク王国との間に人的交流があったこと、②ローマとフランク王国内のみならず、フランク王国内においても聖歌の不統一があり、カール大帝が自らこの問題の解決のために腐心していたことを述べる点では同じである。また、③ローマ聖歌の実践におけるメッツの際立った立場を描く点でも共通している。二つの資料はカール大帝の死から60年から70年ほど経って書かれているが、以上の3点(①～③)については、史実からの何らかの要請に基づいて描かれたと考えてよいかもしれない。

#### 4. ローマ聖歌集の導入

さて、ローマ典礼化を進めるフランク王国宮廷の求めに応じて、ローマ典礼の執行に必要な秘跡書が——十分とはいえないまでも——ローマから送付されていた次第はすでにみた<sup>25</sup>。

ローマ典礼への統一化を通して典礼を整備しようとする動きは、聖歌集の伝承(および編纂)過程においても同様の道筋を辿ったといえる<sup>26</sup>。教皇パウロ1世がピピン3世(王位751-768年)に宛てた書簡(758-763年頃)には、ピピンの願ひに応じて「交唱集 *antiphonale*」と「応唱集 *responsale*」が送られた旨の記述がある<sup>27</sup>。

もちろん、ローマから直接に、あるいはローマとの関係の深い宣教師たちによって、ローマの典礼聖歌集(もしくはその写し)が届けられていたことも考えられる。

響を受け発展した教皇典礼とそれに伴う新しいローマ聖歌の独自性が、フランク王国での典礼と聖歌の発展と競合していた可能性があり、典礼の相違にも顕われる「新しいローマ帝国」の台頭がローマ人の「嫉妬 *invidia*」の原因となったと推測できるという。

<sup>25</sup> 拙稿「グレゴリオ聖歌研究(1)」『南山神学』第32号(2009年)209-228頁、特に225-226頁、ならびに、同「グレゴリオ聖歌研究(2)」『南山神学』第33号(2010年)237-258頁、特に250-256頁を参照。

<sup>26</sup> Cf. C. Vogel, *Medieval Liturgy. An Introduction to the Sources* (revised and translated by W. G. Storey and N. K. Rasmussen), Washington D.C. 1986, 358.

<sup>27</sup> 拙稿「グレゴリオ聖歌研究(1)」(N. B. 1) 225-226頁参照。

例えば、8世紀のヨーク司教エグベルトゥス (Egbertus, 678-766年) に帰される小著『カトリックの定めについての対話』は、四季の斉日についての典礼規則の根拠を述べる際、教皇グレゴリウス1世 (在位 590-604年) によってイングランドに派遣されたアウグスティヌス (550頃-604/9年) に触れ、「わたしたちの師、聖なるグレゴリウスが、わたしたちの教師、聖なるアウグスティヌスを通して[運ばせた] 交唱集とミサ典礼書」に言及している<sup>28</sup>。

この[四季の斉日のうち第2の] 断食日 [の典礼] も同じく、聖なるグレゴリウスが彼の交唱集とミサ典礼書のなかで、聖霊降臨祭後の一週間、イングランドの教会において祝うようにと、前述の使節 [アウグスティヌス] を通してお定めになったのである。このことは、わたしたちの交唱集ばかりでなく、ペトロとパウロのお膝元 [ローマ] で見ることできた彼 [グレゴリウス] のミサ典礼書と彼自身の [交唱集] からも明らかである。<sup>29</sup>

この記述は、8世紀のイングランドの典礼で用いられたミサ交唱集が<sup>30</sup>、「ペトロとパウロのお膝元」の交唱集に由来することを強調している。イングランド教会は、すでに664年のウィットビー教会会議において、復活祭の周期をめぐる

<sup>28</sup> Egbertus, *De institutione catholica* XVI (= PL 89, 441B): Nos autem in Ecclesia Anglorum idem primi mensis jejunium ut noster didascalus beatus Gregorius, in suo antiphonario et missali libro, per paedagogum nostrum beatum Augustinum transmisit ordinatum et rescriptum, indifferenter de prima hebdomada quadragesimae servamus. Cf. F. Kerff, Egbert, in: *LMA* 3 (1999) 1601.

<sup>29</sup> Egbertus, *ibid.* (= PL 89, 441C): Hoc autem jejunium idem beatus Gregorius per praefatum legatum, in antiphonario suo et missali, in plena hebdomada post Pentecosten, Anglorum Ecclesiae celebrandum destinavit. Quod non solum nostra testantur antiphonaria; sed et ipsa quae cum missalibus suis conspeximus apud apostolorum Petri et Pauli limina.

<sup>30</sup> ここでは時課の典礼には直接影響を及ぼさないミサ典礼の祝い方が問題になっている。そのため、ここで用いられる「antiphonarium」も、カロリング期以降用いられるようになった「時課の典礼のための交唱集」という意味ではなく、ミサ交唱集を指すと考えられる。Cf. R. W. Pfaff, *The Liturgy in Medieval England. A History*, Cambridge 2009, 47-48.

問題にあたりディオニシウス式の周期計算法の採用を決定し、ローマの方針に従う方向に大きく舵を切っていた<sup>31</sup>。同教会会議で重要な役割を果たしたヨーク司教ウィルフリッド (Wilfrid, ca. 634-709 年) は3度、カンタベリーのベネディクト会修道院長ビスコップ (Benedictus Biscop, ca. 628-689 年) も6度ローマに旅をし、教皇との関係強化を図っている<sup>32</sup>。

『カトリックの定めについての対話』の著者とされるエグベルトゥスは、若くしてローマに学び助祭になった後にイングランドに帰国、734年ヨーク司教として叙階され、翌年同大司教となった。この小著がエグベルトゥスの真作であるとするれば、ローマの典礼事情にも通じていたであろう彼が、ローマとの絆に訴えてヨークでの典礼整備にあたらうとしたことを、この記述から読み取ることができるだろう。

こうしたイングランド教会の姿勢はフランク王国の宮廷にも少なからぬ影響を与えた可能性がある<sup>33</sup>。「フリースラントの使徒」ウィリブロード (Willibrord, 657/658-739 年)、あるいは「ドイツの使徒」と呼ばれるボニファティウス (Bonifatius, 680-754 年) は、それぞれローマ教皇から任命を受け大陸宣教に従事したが、彼らもまたイングランド出身であった。後にカール大帝に請われてアーヘンの宮廷に入り、ローマとの絆を重視しつつフランク王国の文教政策を推進したアルクイン (730/735-804 年) も、前述のエグベルトゥスの下で整備されたヨーク司教座聖堂付属学校に学び、長じて同学校の責任者を務めていたのである<sup>34</sup>。

<sup>31</sup> Cf. H. Vollrath, Art. Whitby, Synode v. 644., in: LMA 9 (1999) 55-56; D. Hiley, Cambridge Introductions to Music. Gregorian Chant, Cambridge 2009, 93-94. 土屋吉正『暦とキリスト教』(オリエンズ宗教研究所, 増補改訂版, 1987年) 104-105頁も参照。

<sup>32</sup> Cf. Hiley, Gregorian Chant, *ibid.* 94. 拙稿「グレゴリオ聖歌研究(1)」(N. B. 1), 214頁(注12)をも参照。

<sup>33</sup> Cf. Hiley, *ibid.* 拙稿「グレゴリオ聖歌研究(1)」, 同, 214-216頁をも参照。

<sup>34</sup> Cf. M. Folkerts, Art. Alkuin, in: LMA 1 (1999) 417-420. アルクインの政治思想について、五十嵐修『王国』(N. B. 17) 174-194頁を参照。アルクインの関わった文教政策について、拙稿「グレゴリオ聖歌研究(2)」(N. B. 1) 245-247頁(参考文献)をも参照されたい。

## 5. 聖歌古写本の伝承

さて、カール大帝が苦心して入手した秘跡書をはじめとする典礼書の類は盛んに筆写され、修道院や聖歌学校ばかりでなく、末端の教会にまで普及した。

例えば788年から899年にかけて作成された10帳のバイエルン地方の財産目録には、そのうちの6帳に「antiphonarium」「graduale」「nocturnalis」など聖歌集と目される書物の記録があるという<sup>35</sup>。一例を挙げると、プフェトラハ(Pfetrach)とコラーズドルフ(Kollersdorf)の司祭ヴァルトペルト(Waldperht)には828年と830年の記録があり、そこには「ミサ典礼書 missalis」「朗読聖書 lectionarium / comes」「聖務日課祈祷集 officiale」と並んで「交唱集 antiphonarium」が記載されている<sup>36</sup>。現存する7000あまりの9世紀の写本は、実際に作成された写本の1割程度に過ぎないといわれ、当時必要とされた典礼書の需要を満たすには及ばなかったと思われる。しかしそのなかでも聖歌集の残存率は高く、聖歌集が当時非常に重んじられた典礼書だったことをうかがわせる<sup>37</sup>。

### 5. 1. 最初期重要写本群

以下では、ミサの固有唱を中心に収める聖歌集に絞って、フランク教会における編纂の最初期写本を概観しておきたい。

---

<sup>35</sup> Cf. S. Rankin, *The Making of Carolingian Mass Chant Books*, in: C. Gabriela, D. B. Cannata et al. (ed.), *Quomodo cantabimus canticum? Studies in honor of Edward H. Roesner* (American Institute of Musicology: Miscellanea 7), Wisconsin 2008, 37-63. 38.

<sup>36</sup> Cf. C. I. Hammer Jr., *Country Churches, Clerical Inventories and the Carolingian Renaissance in Bavaria*, in: *ChH* 49 (1980) 5-17. 14.

<sup>37</sup> Cf. Rankin, *Making* (N. B. 35), 38.



Stefan Klöckner によれば、聖歌の筆録は、1) 聖歌テキストのみを記載する、2) 聖歌のインチピットを旋法ごとに配列し記載する、3) 聖歌の音楽をテキストとネウマとによって記載する、という三段階を経たと考えられる<sup>38</sup>。

その最初期は、聖歌テキストのみを典礼暦にしたがって記載する段階である。この段階を示す現存する最古層の重要 6 写本は Dom René-Jean Hesbert により比較校訂されている<sup>39</sup>。

- M 『モンツァのカンタトリウム』<sup>40</sup>
- R 『ライナウのグラドゥアーレ』<sup>41</sup>
- B 『モン・ブランダンのグラドゥアーレ』<sup>42</sup>
- C 『コンピエーニュのグラドゥアーレ』<sup>43</sup>
- K 『コルビーのグラドゥアーレ』<sup>44</sup>
- S 『サンリスのグラドゥアーレ』<sup>45</sup>

<sup>38</sup> Cf. S. Klöckner, *Handbuch Gregorianik. Einführung in Geschichte, Theorie und Praxis des Gregorianischen Chorals*, Regensburg 2009, 65-123.

<sup>39</sup> R.-J. Hesbert, *Antiphonale Missarum Sextuplex*, Bruxelles 1935. なお本稿における 6 写本のそれぞれの名称および略号は *Graduale triplex seu Graduale Romanum Pauli PP. VI cura recognitum & rhythmicis signis a Solesmensibus monachis ornatum neumis Laudu-nensibus* (cod. 239) et *Sangallensibus* (codicum San Gallensis 359 et Einsidlensis 121) nunc auctum, Solesmes 1979. に、6 写本の表記および制作場所と年代は（『サンリスのグラドゥアーレ』を除いて）Rankin, *Making* (N. B. 35), 59 に、形状の表記は Hesbert, *Sextuplex*, *ibid.* に従った。

<sup>40</sup> Monza, *Tesoro della Basilica*, CIX. (北東フランス, 9 世紀中～後葉, 縦 333 mm x 横 105 mm, 全 14 葉)

<sup>41</sup> Zürich, *Zentralbibliothek Rheinau*, 30, fol. 1<sup>v</sup>-13<sup>v</sup>. (南ドイツもしくはスイス, 8 世紀, 縦 282 mm x 横 175 mm, 全 189 葉)

<sup>42</sup> Brussels, *Bibliothèque royale*, 10127-10144, fol. 90-115. (北フランスあるいはベルギー, 8 もしくは 9 世紀, 縦 207 mm x 横 135 mm, 全 136 葉)

<sup>43</sup> Paris, *Bibliothèque nationale*, lat. 17436, fol. 1<sup>v</sup>-107<sup>v</sup>. (カール 2 世禿頭王 [在位 840-877 年] の宮廷サークルが制作, コンピエーニュ?, 860-877 年, 縦 320 mm x 横 190 mm, 全 107 葉)

<sup>44</sup> Paris, *Bibliothèque nationale*, lat. 12050, fol. 3-17. (コルビー, 9 世紀中頃, 縦 315 mm x 横 250 mm, 全 248 葉)

いずれの写本も、縦幅が横幅よりも大きい「長方 (Le format rectangulaire)」もしくは縦幅が横幅のおよそ倍の「縦長 (Le format oblong)」かつ小さめのサイズである<sup>46</sup>。なかでも『モンツァのカントトリウム』(以下 M) は縦 333 mm × 横 105 mm の典型的な「縦長」型であり、しかもカントール (聖歌独唱者) 用の聖歌を、昇階唱とアルルヤ唱はインチピットで、詠唱のみ全文で記している。このことから、『ローマ儀式書 I』(7 世紀末頃) や<sup>47</sup>、カロリング期の典礼学者アマラリウス (Amalarius, ca. 775/80-ca. 850 年) の記述に照らし<sup>48</sup>、M がローマのカントールが用いていたいわゆるカントトリウムの形式を踏襲する聖歌集だったことが推測される<sup>49</sup>。

また『コンピエーニュのグラドゥアーレ』(以下 C) は、860 年から 877 年の間に制作され、カール 2 世禿頭王 (在位 843-877 年) の宮廷聖堂 (コンピエーニュの聖コルネリウス聖堂) で使用されていたという。9 世紀初頭のアーヘンの宮廷において使用されていた原本の精確な写しである可能性も指摘されている<sup>50</sup>。

## 5. 2. 「司教グレゴリウス」(Gregorius praesul)

興味深いのは、このようにローマ由来の聖歌集であることを示唆する M, C, および『モン・ブランダン・のグラドゥアーレ』(以下 B) に、聖歌の制作を教皇

<sup>45</sup> Paris, Bibliothèque Sainte-Geneviève, 111, fol. 9-23. (サンリス, 877-882 年, 縦 275 mm x 横 210 mm, 全 185 葉)

<sup>46</sup> 聖歌集写本の形態や装丁について, M. Huglo, *Les livres de chant liturgique* (TSMÂO 52), Turnhout 1988, 75-79. を参照。

<sup>47</sup> Cf. *Ordo Romanus I*, 57 (= M. Andrieu [ed.], *Les ordines romani du haut moyen âge. II. Les texts [Ordines 1-13]* [SSL 23], Louvain 1971, 86: *Deinde ascendit alius cum cant [atorio], dicit responsum. Deinde alius Alleluia.*

<sup>48</sup> Cf. Amalarius, *Liber officialis III xvi* (= PL 105, 1123B): *Cantor, sine aliqua necessitate legendi, tenet tabulas in manibus.*

<sup>49</sup> Cf. Huglo, *Les livres* (N. B. 46), 94-99; E. Palazzo, *A History of Liturgical Books from the Beginning to the Thirteenth Century*, Minnesota 1998, 74-75.

<sup>50</sup> Cf. Palazzo, *History*, *ibid.* 72-73.

グレゴリウス 1 世に帰する序文「司教グレゴリウス *Gregorius praesul*」をみる  
ことができる点である。先にイングランドにおける伝承に触れたが、聖歌写本  
伝承においても、すでに 9 世紀初頭には、ローマから導入された聖歌を教皇グ  
レゴリウス 1 世（在位 590-604 年）の手によって紡がれたものだとする伝説が  
流布していたことがわかる。例えば、9 世紀初頭に筆写された B には次のよう  
な記述がみられる。

神のみ名において、聖グレゴリウスにより定められた年間のための交唱集  
がここに始まる。<sup>51</sup>

他方、B より後代の M の序文は、交唱集制作へのグレゴリウスの関与をより  
明確に打ち出している。

功績と名声において誉れ高い司教グレゴリウスは、出身の地において最高  
の榮譽に登位し、先達の教父たちの業績を刷新し、聖歌隊のため、いと高  
き神のみ名においてこの音楽の書を作成した。<sup>52</sup>

C も同様に、交唱集がグレゴリウスによって作られたことをうたっている。

功績と名声において誉れ高い司教グレゴリウスは、最高の榮譽に登位し、  
先達の教父たちの業績を刷新し、聖歌隊のためにこの年間用の音楽の書  
を作成した。<sup>53</sup>

---

<sup>51</sup> Hesbert, *Sextuplex* (N. B. 39), 2: In dei nomen incipit antefonarius ordinatus a sancto Gregorio per circulum anni.

<sup>52</sup> Hesbert, *Sextuplex*, *ibid.*: Gregorius praesul meritis et nomine dignus unde genus ducit summum conscendit honorem qui renovans monumenta patrumque priorum tum composuit hunc libellum musicae artis scholae cantorum. Cf. D. Hiley, *Gregorian Chant* (N. B. 31), 98.

教皇グレゴリウス 1 世が交唱集の制作に関わったという伝承は、前述の助祭ヨハネスの『聖グレゴリウスの生涯』(875 年頃)にもみられるが<sup>54</sup>、現代的な意味での歴史性を欠くものと一般には認められている。ここでは、中世において「四大司教」の一人に数えられたグレゴリウスの権威を帯びて聖歌が伝承され、それゆえに大きな影響力を持ちえたことを指摘しておきたい<sup>55</sup>。

聖歌集編集者たちのローマ典礼への恭順は序文の記述に留まらなかった。Stefan Klöckner も指摘するように<sup>56</sup>、フランク教会にとっては現実的ではない典礼注記、たとえば集会指定聖堂の指示なども、これらの写本は忠実に再録し

<sup>53</sup> Hesbert, *Sextuplex* (N. B. 39), 3: Gregorius praesul meritis et nomine dignus summum concendens honorem qui renovavit monumenta (*sic!*) patrum priorum et composuit hunc libellum musicae artis scholae cantorum per anni circulum.

<sup>54</sup> Johannes Diaconus (Hymnonides), *Vita St. Gregorii II*, 6 (= PL 75, 90C-90D): Deinde in domo Domini, more sapientissimi Salomonis, propter musicae compunctionem dulcedinis, Antiphonarium centonem cantorum studiosissimus nimis utiliter compilavit; scholam quoque cantorum, quae hactenus eisdem institutionibus in sancta Romana Ecclesia modulatur, constituit; eique cum nonnullis praediis duo habitacula, scilicet alterum sub gradibus basilicae beati Petri apostoli, alterum vero sub Lateranensis patriarchii domibus fabricavit, ubi usque hodie lectus ejus, in quo recubans modulabatur, et flagellum ipsius, quo pueris minabatur, veneratione congrua cum authentico Antiphonario reservatur, quae videlicet loca per praecepti seriem sub interpositione anathematis ob ministerii quotidianam utrobique gratiam subdivisit.

<sup>55</sup> グレゴリオ聖歌の制作を教皇グレゴリウス 1 世に帰する中世の伝承への評価について以下を参照。Cf. D. Hiley, *Western Plainchant. A Handbook*, Oxford 2005<sup>2</sup>, 503-513. S. Rankin, *Carolingian Music*, in: R. Mcktterick (ed.), *Carolingian Culture: emulation and innovation*, Cambridge 1994, 274-316. 277-278 は、799 年以前に制作された説教集の写本 Staatsbibliothek Berlin, MS Phillips 1676 において初めてグレゴリウスが四大教父の一人に数えられていることに言及している。R. Warland, *Das älteste Bildnis des hl. Augustinus? Zum Wandmalereifragment eines spätantiken Autors im Lateran*, in: Norbert Fischer (Hrsg.), *Augustinus - Spuren und Spiegelungen seines Denkens. Band 1: Von den Anfängen bis zur Reformation*, Hamburg 2009, 13-18. 16. によれば、この写本には、それまでの伝統だった四福音書記者像に代わり、四大司教(アウグスティヌス、教皇レオ 1 世、アンブロジウス、教皇グレゴリウス 1 世)が描かれている。

<sup>56</sup> Cf. Klöckner, *Handbuch* (N. B. 38), 69. Klöckner はここで『ライナウのグラドゥアーレ』に記載された四旬節第四週の水曜日、金曜日、土曜日および四旬節第五主日における典礼注記に言及している。典礼注記の原文は Hesbert, *Sextuplex* (N. B. 39), 76-80. を参照。

ているのである。これもフランク教会のミサ典礼が「ローマ教皇の典礼」と同一性を保っていることを強調するためと思われる<sup>57</sup>。

### 5. 3. 聖歌テキストに対する新しい態度

8世紀から9世紀末までのおよそ1世紀以上も制作年に幅があるこれら6写本をつぶさに観察すれば、それぞれの発展段階が自ずと明らかになってくる。Susan Rankinの研究によれば、その最も顕著な例を、Cおよび『コルビーのグラドゥアーレ』(以下K)にみることができるという。

際立つのは、CとKが、他の4写本と異なり、聖歌テキストの全文の掲載に努めている点である。Rankinにしたがって、聖月曜日の奉納唱「Eripe me」を、彼女が参考にする「シャーロシュパタク断片」(Sárospatak, Library of the reformed church, s. n., 失われたグラドゥアーレからの1葉, イタリア, 8世紀末, Sáと略記)および「ローマ詩編書」(PRと略記)と「ガリア詩編書」(Gaと略記)<sup>58</sup>,さらには現行の聖歌集『グラドゥアーレ・トゥリプレックス』(GTと略記)をも併せて比較してみよう。聖歌テキストは詩編143(142):9-10によっている。各写本からの引用文の1行目は詩編143(142)の第9節,2行目は10節である。インチピットのみを記すRとSには10節の記載はない。なお、聖歌テキストの根拠である「ガリア詩編書」の聖書本文は便宜上ボールドで記しておく<sup>59</sup>。イタリックは縮綴による不記載文字を指す。

<sup>57</sup> Cf. Klöckner, Handbuch (N. B. 38), *ibid.*

<sup>58</sup> Cf. Rankin, Making (N. B. 35), 39. テキストは Rankin のほか, Hesbert, *Sextuplex* (N. B. 39), 90-81 ならびに, *Graduale triplex* (N. B. 39), 151-152. を参照。なお, カンタトリウムである M には奉納唱は収められてない。

<sup>59</sup> ガリア詩編書について, 拙稿「グレゴリオ聖歌研究(2)」(N. B. 1) 243 頁を参照。

「Eripe me」

R Eripe me de inimicis meis.

B Eripe me de inimicis meis  
doce me facere voluntatem tuam.

Sá Eripe me de inimicis meis domine  
doce me facere voluntatem tuam quia factus [es] adiutor [meus].

C Eripe me de inimicis meis Domine ad te confugi  
doce me facere voluntatem tuam quia Deus meus es tu.

K Eripe me de inimicis meis Domine ad te confugi  
doce me facere voluntatem tuam quia Deus meus es tu.

S Eripe me de inimicis meis.

PR Eripe me de inimicis meis domine ad te confugi  
doce me facere voluntatem tuam quia tu es deus meus.

Ga **Eripe me de inimicis meis domine ad te confugi**  
**doce me facere voluntatem tuam quia deus meus es tu.**

GT Eripe me de inimicis meis, Domine: ad te confugi  
doce me facere voluntatem tuam: quia Deus meus es tu.

これをみると、上記 6 写本のうち、現行版の GT と同じテキストを全文掲載するのは C と K のみである。Sá も同様の傾向を示すものの「ad te confugi」の文言を欠いており、後半は詩編 30 (29): 11 を採用している。一方、C と K と対照的な傾向を示すのは、インチピットのみを記す R と S である。B も、他の聖歌では主にインチピットのみ記している。「Eripe me」の場合、5 日前、すなわち四旬節第五週水曜日の奉納唱も同じ冒頭句で始まる別の聖歌「Eripe me」(GT 129) であるところから、混同を避けるために後半部の歌詞からもその一

部を記していると推測される。このように聖歌編集者はそれぞれ、典礼共同体やカントールの事情に応じ自律的に筆を運んでいる<sup>60</sup>。

テキストの全文掲載は 10 世紀前後から制作され始める記譜付き聖歌写本の特徴でもある。つまり、C と K は記譜付き聖歌写本が登場する前夜に制作されている可能性がある。Rankin によれば、労苦を厭わず全文を記すところに、典礼文である歌詞テキストに対するカロリング期の新しい態度を看取することができる。それは、カロリング小文字や、分かち書き、句読法、(典礼注記と典礼文の相違を示すための) 書体の階層化といった、カロリング期に展開されたリテラシーを駆使し、丁寧にテキストを書きおこすことによって、「よりよき語り」を実現しようとするカロリング期の典礼刷新の精神の体现でもあった<sup>61</sup>。もちろん、全文掲載を文化の衰退とみることもできるかもしれない。主にインチピットのみを掲載する M などは、朗読台の最上段でカントールが手に携えることによって、典礼の場における「神のことばのプレゼンス」を示すシンボルとしての役割を担ったのであり、聖歌そのものは聖歌集を開いて「読む必要はなく」、誦んじて歌われたからである<sup>62</sup>。その意味では、記憶文化の衰退から全文を記す必要が生じたともいえるかもしれない。しかし、8 世紀から 9 世紀にかけて制作された 6 写本のなかでは R と並び古い B に、「この週 [の聖歌] はローマ交唱集にはない」との記載がすでにみられるように、写本間の照合作業が進むにつれ、ローマから導入された聖歌集の内容とそれまで伝承されていた聖歌テキスト群とではしばしば相違も生じた<sup>63</sup>。ラテン語の正確さへの意識から、伝

<sup>60</sup> Cf. Rankin, *Making* (N. B. 35), 42-44; Hesbert, *Sextuplex* (N. B. 39), 84: *Eripe me de inimicis meis Deus meus.*

<sup>61</sup> Cf. Rankin, *Making*, *ibid.* 44. 51-52.

<sup>62</sup> 本稿の注 48 を参照。

<sup>63</sup> Cf. Rankin, *Making* (N. B. 35), 50-51 ; Hesbert, *Sextuplex* (N. B. 39), 180: *EBDOMATA VII [POST OCTABAS PENTECOSTEN]. ISTA EBDOMATA NON EST IN ANTEFONARIOS ROMANOS.*

承された歌詞の語句修正も少なからず行われた<sup>64</sup>。記憶のみに頼れない、このようなレパートリーの追加や変更あるいは（しばしば細かな）文字修正のゆえに、「正しいテキスト」の継承のために、修正後の聖歌テキストを書きおこしておこうとしたと考えられるのである。

したがって、Rankin も主張するように、上記 6 写本の次世代に登場するネウマ付き聖歌写本も、決してテキストから遊離した音楽を書き留める記譜の誕生ととらえてはならない。むしろ、ネウマは、カロリング期のリテラシー改革の延長線上に位置するものと理解すべきであろう。この新しい記譜法は、カロリング期のフランク教会が国をあげて取り組み、個々の典礼共同体の歌唱者も目指した「bene loquendo」の補助手段として編み出されたと考えることができるだろう<sup>65</sup>。

### おわりに

以上、カロリング期、特にカール大帝治世下における聖歌学校の設立やローマとの人的交流、さらには、記譜を伴わない聖歌最古写本の伝承とそれらの特徴の概見を試みた。いずれの局面においても、ローマの典礼実践に対しては、それがローマ司教座の権威をもって伝承されたがゆえに、フランク教会において大きな敬意が払われていたことがうかがえる。と同時に、人的交流や聖歌写本の流布により相互の実践の間の齟齬が次第に明らかになるにつれ、フランク教会は彼らの新しいリテラシーと心性に従って、欠落を補い、乖離の解消に努めていった。

今後は、今回観察した記譜なし写本とネウマ付き写本との連続性にも注目しつつ、聖歌学者 Klöckner による聖歌の筆録の第 2 段階（聖歌のインチピットを

---

<sup>64</sup> Cf. Rankin, *Making*, *ibid.* 46-51.

<sup>65</sup> Cf. Rankin, *ibid.*, 57-58.



旋法ごとに配列し記載する段階), および第 3 段階 (聖歌の音楽をテキストとネウマとによって記載する段階) を追うことにしたい。

\* 本稿は, 「平成 22 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) (課題番号 22520158)」ならびに「2010 年度南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-2 (Nanzan University Pache Research Subsidy I-A-2 for the 2010 academic year)」に基づく研究成果である。